

言葉の力を信じながら。



画・黒田征太郎

二〇二五年、^{星の}星の年が明けた。いわきでの初日の出は水平線に雲がかかっていたとはいえず、勢いよく空を焼いた。寒風にさらされ、すがすがしい年の始まりになった。

詩人で評論家の大岡信は「日本近代詩の風景」のなかで、「時代のうねり、激動の中では、詩人や文学者が手にしている『言葉』という武器は、まことにみずほらしく無力なもののように見える。けれども、わたしは人類にとって、究極的にその救いとも慰めともなりうるもの、新しい明日への希望と活力を与えてくれるものが、言葉の力にあるという信念を放棄することはできない」と書いた。

その文章にふれ、言葉を活字に載せて思いを伝える仕事をしている端くれとして、新年早々、眠っていた精神をたたき起こされた。

今年を終戦・原爆投下から八十年、阪神淡路大震災から三十年にあたる。さらに東日本大震災・原発事故から十四年、能登半島沖地震から一年がたった。

「天災は忘れたころにやってくる」とは物理学者で随筆家、寺田寅彦の有名な警句だが、寅彦は一九二三年（大正十一年）に起こった関東大震災の調査に当たり、その著書『天災と国防』のなかで文明が進むほど自然災害の被害が増大することを指摘し、普段の備えがいかに大事かを説いた。とはいえず、時が過ぎると悲惨な記憶は風化し、また同じことが繰り返される。だからそれぞれが「決して忘れない」ことを胸に刻み、説得力のある言葉で一人でも多くの人に伝え続けなければならぬのだと思う。

二〇二一年三月十一日午後二時四十六分に発生したマグニチュード9.0の地震と津波、そして原発事故を体験した身としては、寄せては返すようなシレンマ

に苛まれている。能登ではあの時と同じように避難所や仮設住宅の問題が噴出し、関連死が増え続けている。国や自治体はなぜ神戸や福島に学べないのか。

原発の廃炉、それにとまなう中間貯蔵施設や海洋放出のやり方についても首をかしげることが多い。国は原発再稼働に舵を切り、福島県はいま、「これでもか」というほど再生エネルギーを推進している。その結果、いわきの山は太陽光パネルに被われ、風力発電の巨大な羽根が遠くからも見えようになった。しかもその電気は既存の送電線を使って関東方面に送られている。原発事故前と何も変わっていないのだ。

あの事故のあと、放射能が拡散した場合の途方もないリスクに身震いをした。しかし、国は、電通などの広告代理店に巨額な予算を投入して安全キャンペーンを繰り返して放射能に対する心配をタブー化、「風評被害」として矮小化してきた。そして「風評加害者」という言葉まで生まれた。

新聞記者はよく、「半歩先を見て記事を書け」と言われる。それは、発表にとられ流されると、事象を追うだけのトピック新聞になってしまう。過去に学びながら今行われていることが先行きどうなるのかを冷静に考え、未来世代に向けて記事を書け、ということなのだと思う。確かに大岡信が言うように、多様なメディアが現れて平気でフェイクニュースも飛び交う時代になって、記者が手にしている「言葉」という武器はみずほらしく無力なのかもしれない。しかし、例えばそれが砂漠にジョーロで水を注ぐような途方もない作業でも、さまざまな意図や策略に抗い丁寧に真実を伝え続けられれば、かすかすでも希望が生まれて未来につながるかも知れない。そう信じたい。

主な記事

認知症の母を介護して
思うこと① 松山 良子

2.3

阿武隈山地の絶滅危惧種②
湯澤 陽一

5

30年中間貯蔵施設地権者会
門馬好春さんのはなし

10.11

30年中間貯蔵施設地権者会会長 門馬好春さんのほなし

地域や国民の安心安全を最優先に考えて

双葉郡大熊町と双葉町にまたがる中間貯蔵施設に、除染で出た汚染土などが運び込まれ始めて、三月で十年になる。搬入開始の四月ほど前に「30年中間貯蔵施設地権者会」が発足し、定期的に環境省から説明を受けながら意見交換するなどして、三十年となる二〇四五年三月までに、汚染土などを福島県外の最終処分場に運び終える約束を守らせようとしている。会長の門馬好春さん(67)に自身のことや故郷への思い、中間貯蔵施設に対する考えを聞いた。

私は大熊町天沢長者原で生まれ育ちました。実家から福島第一原発までは約200m、ほんとうに近く、見たなくとも原発が見えました。両親が農業をしながら勤めに出ていた兼業農家の家庭で、きょうだいはいは姉、兄が一人ずつ、私が一番下です。

幼いころにはまだ、原発はありませんでした。だんだん「原発ができる」と聞くようになり、小学四年生のころに建設が始まりました。子どもの感覚でもあの辺り一帯は貧しく、冬になると農家は東京方面に出稼ぎに行きました。

私の父も出稼ぎに行っていましたから、単純に原発ができれば働け口もできて、冬でもみんなで飯が食べられ、その意味で「原発ができることは、いいことなんだ」と思っていました。中学、高校時代は私も原発敷地内の除草のアルバイトをしました。

原発の建設とともに水道が整備されるなど、町全体が経済的に豊かになってきた感じがしました。でも、いま振り返ると、その豊かさは本当の豊かさではありませんでした。それまで食べられなかった物が食べられるようになったというように、物質的な欲求を満たしただけです。

私は熊町小学校で学び、熊町中学校では最後の卒業生で、そのあと熊町中は大野中と統合して大熊中になりました。昭和四十八年春です。その年に双葉高校に入学しました。一昨年、双葉高校は創立百周年を迎えました。その際、五十年前、

私が高校一年生の秋に発行された新聞部の「双高新聞」(創立五十周年記念式典に合わせて制作された四ページの新聞)が話題になりました。

そこには「原子力の安全性を問う」という特集があり、住民の意識調査と安全性に関する専門家のインタビューが掲載されていました。しかし記念式典の当日、新聞の配布を止める声があり、式典では配られませんでした。同級生や先輩があつた時代にこのような新聞を作っていたのですから、私も原発の危険性をもっと勉強しておけばよかったと思っています。

高校を卒業後、東京で就職し、二十五歳の時、結婚を機に大熊に戻ってきましたが、五歳下の妻の具合が悪くなり、東京の大学病院でないと治療が難しいということと、三十歳の時に再び東京に出て、以来、東京で暮らしています。妻は十年前、五十三歳で亡くなりました。私の母が他界したのと同じ年齢でした。

二〇一一年に震災・原発事故が起き、双葉町に住んでいた姉、家を継いだ兄と連絡が取れたのは、四、五日経ってからです。いま姉は中通り、兄は相馬で暮らしています。実家を初めて訪れたのは三、



四年後だったと思います。家だけじゃなくて周辺すべてががらんとして、時間が止まっているようでした。

事故から二年ほど過ぎたころ、中間貯蔵施設の話が出てきました。親が亡くなった時に、私も田んぼを一枚、約3000㎡を相続しているので、地権者の一人です。

環境省は二〇一三年六月から一年ほどの間に、中間貯蔵施設の建設に向けての住民説明会を十六回開きました。用地補償などをめぐって地元との調整が難航す

50年前の「双高新聞」のこと 原発設置反対が62%



常磐湯本町の古滝屋の九階にある「原子力災害書証館」で門馬好春さんに話を聞いた時、持参していた昭和四十八年(一九七三)秋に発行の双葉高校新聞部の「双高新聞」を見せてもらった。四ページの新聞で、三ページがすべて特集「原子力の安全性を問う」で埋まっている。その内容を紹介します。

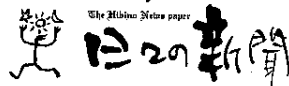
その新聞が作られた時、福島第一原発は六号機まで建設工事に着手され、一号機はすでに運転が始まっていた。「双高新聞」の特集は地域住民への意識調査と、安全性についての専門家のインタビューが掲載されている。

意識調査では双葉町、大熊町など周辺の約二百世帯にアンケート(設問は四つ)を実施、回収率は87%だった。まず、原発設置に賛成が28%、反対が62%、わからないが10%。賛成理由は「電源資源開発に役立つ」が最も多く60%、逆に反対理由は「安全性に不安」で59%。

古きを訪ねて新しきを知る



いわき Biweekly Review



■新聞1部500円で月1,000円(消費税・配達料込み)
月2回発行 半年6,000円 年間12,000円

購読申し込みは
(TEL・FAX) 0246
21-4881

■お申し込み方法=日々の新聞社に電話かFAX、メールで「購読希望」と明記し住所、氏名、電話番号、メールアドレスを知らせてください ■お支払い方法=当社では少人数で会社経営に当たっている関係で、購読者の方には郵便振替と銀行口座振込による前払いをお願いします。煩雑な集金業務を省力化し、編集に時間を割くためのシステムですので、ご理解のほどよろしく願います。なお手数料は当社負担とします。郵便振替の用紙は新聞と一緒に届けます。また、銀行口座振込は、東邦銀行谷川瀬支店(普通)358046 日々の新聞社までATMにて108円を引いた額でお振り込みください。 ■お問い合わせ・ご注文=日々の新聞社 〒970-8036 福島県いわき市平谷川瀬一丁目12-9 MAIL:hibi@k3.dion.ne.jp URL: http://www.hibinoshinbun.com/

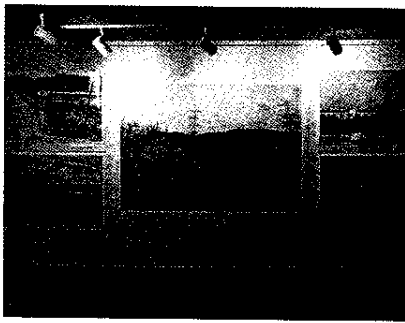
中間貯蔵施設のこと

原子力災害
考証館から発信

門馬好春さんは2022年4月から、古滝屋にある「原子力災害考証館」に、30年中間貯蔵施設地権者会などを紹介するパネルを展示している。中間貯蔵施設を中心に福島第一原発事故による現状を1人でも多くの人に知ってもらうため、翌23年にはフォトジャーナリストの豊田直巳さんの写真も加え、状況がより伝わる展示になっている。昨年末にも豊田さんたちとともに展示レイアウトを変えた。

「中間貯蔵施設の課題だけでなく、原子炉建屋や格納容器、デブリの取り出しを含めた廃炉、さらに原発裁判や甲状腺など、原発事故を取り巻く問題は山ほどあります。それら問題は時間の経過とともにより複雑化しています。原発の問題は日本を不幸にします。原発被災者の思い、各地にある原発の危険性を若い人たちに知ってほしい。若い人たちの未来をつないでいくのは大人の責任。この考証館の展示は未来に向けての発信です」と、門馬さんは話す。

この春、門馬さんは『未来のバトン—福島県中間貯蔵施設の不条理を読み解く』（インパクト出版会・定価は2000円+税）と題した本を出版する。そこでも未来に向けてメッセージを伝える。



るなかで、当時、環境大臣だった石原伸晃さんが「最後は金目でしょう」と、官邸で記者団に語ったひと言が物議を醸し、住民の怒りを買いました。

そこで七月末に敷地を完全国有化するのではなく、土地使用の契約という地上権が初めて出され、秋に地権者説明会が開かれました。これは順番が逆です。外堀を埋めてからの開催ですから。それに地権者の要望は一切聞き入れられず、説明会ではなくて通告会でした。

例えば、除染の仮置き場は原発事故前の地代で算出されましたが、中間貯蔵施設の地代は原発事故後の価格で計算されています。その理由を尋ねても、環境省は答えられません。つまり、国有化は国の権利を強くするためだと、私は思っています。

そのあと、環境省は年間1mSvを基準に8000Bq以下のものを、再利用という名目で全国にばらまく計画なども出してきました。原子炉等規制法では100Bq(すべて1kg当たり)以上の放射性廃棄物はドラム缶などに入れて施設内で保管されることになっているのに。

ですからそれは国会の審議を経て、専門家が熟議した上で法律に沿った取り組みをしてほしいです。そうでないとなんと対立が起き、福島県民が加害者扱いされかねません。もちろん、中間貯蔵施設への搬入開始から三十年以内に福島県外での最終処分を終えるという、福島県民

との法律での約束も守ってほしいです。

環境省と個人で交渉しても潰されま。地権者はみんな同じ思いだったので、二〇一四年十二月に30年中間貯蔵施設地権者会を立ち上げました。会員が百数十人で始まりましたが、この十年の間に高齢で動けなくなったり、亡くなったりしています。

私たちは中間貯蔵施設自体に反対しているわけではありません。ただ中間貯蔵施設では、治外法権状態のように何をしてもいいではなくて、ルールに基づいたやり方をしてほしいだけなのです。

事業そのものが土地収用法三条の二十七の二(東北地方太平洋沖地震に伴う原子力発電所の事故により放出された放射性物質による環境の汚染への対処に関する特別措置法)による汚染廃棄物等の処理施設)で、仮置き場や仮設処理施設、セメント固化施設などと同じなのです。でも堂々巡りで、常に責任逃れと時間稼ぎをしています。

すでに東京ドーム約十一杯分の汚染土が運び込まれています。三十年後どこかへ持って行くという約束で造った施設です。約束を守るためにはどうするのですか。量を減らしたり分別したりする前に、一番難しい県外処分地の場所選定をやらないと。初めに場所を決めていけば、もう運べるのですから。それなのに環境省の職員は二年ごと変わってしまい、継

続バトンリレーをしています。

お金がかかることはかりして、そのお金は地元ではなく、すべてゼネコンに行くようになっていきます。私個人としては、日本には一万四千ぐらいの島があるので、火山活動の心配がなく、人の住んでいない島を選び、外に漏れたりしないように整備して、8000Bqで分けてすべての土壌をその島に船で運ぶのがいいと考えています。

新宿御苑や所沢で汚染土の再利用の実証実験をしようとしています。地元の反対運動が起きています。「住民の意向は聞かない」と環境省は言っていますが、それではさらに対立と分断が起きてしまいます。だから人がいない無人島に、すべて持って行くのです。

ALPS処理水の海洋放出についても、事故を起こした原発建屋を凍土壁で囲んでもその上下から地下水がわき上がってきますから、いまも毎日、汚染水は増えています。汚染水が増えないような手法をして、汚染水の量を確定させ、海洋放出するのではなくて石油タンクに溜めておけばいいのです。根本的なやり方が間違っています。


十二回目の環境省の説明会が昨年十二月に行われました。その席でも、私の意見として無人島での最終処分を提案しました。三十年まであと二十年と数カ月しかありません。地域や国民の安心安全を最優先に考えてほしいです。

また「原発が地域開発に役立つか」の問いには、思うが49%、思わないが42%。「原子力の正しい知識を持っていると思うか」の問いは「思う」が25%、「思わない」が50%だった。

専門家へのインタビューは事故とその対策、平常運転時の環境への影響、放射性廃棄物と処理、原子炉の寿命と処分—の四つについて。専門家は「放射能はどんなに微量でも影響がある。浴びた量に比例することとは間違いなし」と、放射能障害について語っている。

冷却水に使われた海水の温排水にもふれ「海流との関係、プランクトンか、海藻類への影響、全体的な生態系の調査では東電の見解は安易」と指摘。温排水に含まれる放射能の影響についても、まだまだ不安を残すとしている。

そして特集は「原発が私たちに何をもたらすのか、正しく判断していかねばならない」と、締めくくっている。



兎渡路の家

から奏でるピアノ

~今ここにいるということ~

by kose noriko

こせのりこ
巨勢典子 作曲・ピアノ

Nujabes「reflection eternaly」に「I miss you」がサンプリングされる。NHKスペシャル「絶滅から教えるか 伝説のアムールヒョウ」音楽制作。映画「私の叙情的な時代」音楽制作。びあフィルムフェスティバル技術賞・企画賞受賞。NHKBSP「ニッポンの里山」音楽制作。映画「花のあとさき」音楽制作。キネマ旬報文化音楽賞受賞。2024年10月NHK Eテレの音楽番組にて「I miss you」が紹介される。HP <http://kosenoriko.com/>

新年おめでとうございます。
昨年も1300件以上の白内障手術をはじめ、多くの方の外来診療を行うことができました。本年もよろしくお願いいたします。

2025. **2/15** (sat.) 15:00~

料金 2,000円(お1人様)

会場 兎渡路の家 木村眼科クリニック研修センター
〒970-0224 平量間兎渡路370-8

お問い合わせ・お申込み
090-6178-8168 (木村恵子)



兎渡路の家
木村眼科クリニック研修センター
〒970-0224 平量間兎渡路370-8



木村眼科クリニック
日本眼科学会認定眼科専門医 院長:木村謙二郎
〒970-8026 平字下の町7-4 TEL.0246-24-3355